

ぶらぶら歩いていると

教科書に掲載されている作品の舞台や小説家ゆかりの地が、日本のあちこちに残っている。今年度、新しい街で生活することになり、そんな場所を感じに散策することが教員である私のひそかな楽しみであった。しっかり準備をして観光するのも楽しいが、住んでいるからこそ意図せず遭遇することもあるように思う。

世の中が落ち着いている頃合いを見計らい、慣れない電車を乗り継ぎ、ぶらぶらと活字で描かれた世界を探していると、とある橋のそばで、「山吹之里」と刻まれた石碑と案内板を見つけた。江戸時代の逸話集『常山紀談』に収録されている、太田持資歌道に志す事という話に縁があることが書かれている。

太田持資歌道に志す事の中で、この石碑に縁のある部分は次のような内容である。突然の雨に降られた男が、ある家で少女に蓑を借りようとする。少女は男に山吹の一枝を差し出す。蓑を借りようとしたのに枝を差し出された男は怒ってその場を立ち去る。後にその話を聞いた者から、少女の行為が古歌に寄せた男への返答であると教えられ、男は自らの無学を恥じそれ以降歌道に精進する。(詳細が気になる方は検索していただくと、古歌の中身や、雨具について歌でどのように返答したのか、作品、登場人物の解説等、有名な逸話ですので多くの情報を確認可能です。)

里の設定がこの土地であったのかと不勉強を恥じながら、他にも里候補がいくつもあるとの説明書きに伝説の地特有の安心感を覚えつつ、つつい授業でどうあつかおうかと考えてしまう。

本文を読み、どの単語の意味が分からないだろうか、文法的に問題になりそうな箇所はどこだろうか、現代語訳はできるであろうか、現代語訳ができたとして、この物語の核心の部分はどう発問するだろうか、どう発問すれば考えてもらえるだろうか、考えたうえでこの話の核心や文化的な部分を他者にどう説明するだろうか、考えるためにタブレットやICT機器を用いた方が作品理解のための周辺情報の回収、並列化に効果的であろうか、検索は諸刃の剣で壮大なネタバレとなり考える余地を残すのだろうか、ならば、協働的な学習であれば深化できるだろうか、安易に答えにたどり着くのは避けたいな。どこを目標にしたものか。

ただの職業病なのか、あるいは、脈々と受け継がれてきた作品だからこそ、即物的で利那的で深みを感じない手順や方法の書かれた文とは違い、考えようという気になったのか。

そういえば、こんな時間を過ごせたのは、外をぶらぶらできたからなのだが、ぶらぶらできるのも特別なことになってしまった。

どうか、落ち着いてぶらぶらできる、かつての当たり前の日々が続きますように。

(K・K)